

日本における新型コロナ時代の英語受講留学生

朝 水 宗 彦

セノ・ブディ・アジャル
(山口大学東アジア研究科)

徐 少 辰
(山口大学東アジア研究科)

周 文 婷
(山口大学東アジア研究科)

Summary

In the 2000s, English-Medium Instruction (EMI) in non-English countries developed worldwide. Japan is one of these countries and the number of English-based students who cannot utilize Japanese language increased. Some of the Japanese universities offer dormitories for international students, who can gradually get used to learning the Japanese way of life after they arrive in Japan. Some of the universities also offer cultural exchange programs for EMI students. However, due to the COVID-19, the situation has changed.

Keywords: COVID-19, English-Medium Instruction (EMI), Japan

1. はじめに

2000年代になると、非英語圏の国々における英語を用いた授業（English-Medium Instruction: EMI）が世界的に発展した。日本もその中の一つであり、各地にて日本語が分からない英語基準の学生が増加した¹⁾。少なからぬ日本の大学では留学生のために寮を準備し、日本到着直後に日本語が分からなくても、徐々に日本の暮らしに慣れるようになった。EMI留学生のために

1) 本研究はコロナ前の日本におけるEMIについては詳しく扱わないが、関連した研究として以下のものが挙げられる。HEIGHAN Juanita (2014) "Voices on Campus: International Students in an English-medium Instruction Degree Program in Japan", HEDRICK Roy Gerard III (2021) "Migrants or Study Abroad? An analysis of the study abroad experience of foreign students in an English taught degree program in Japan"

英語で文化交流プログラムを用意している大学もある。

しかしながら、コロナ禍により、これらの留学生を取り巻く環境は大きく変わった。入国後の日本文化体験プログラムへの参加はおろか、通常の授業への参加も対面からオンラインに変わり、日本人との接触機会が限定されるようになった。そもそも入国規制により、日本での滞在期間も減少した。本研究では、コロナ禍で大きく変わった日本におけるEMI留学生の状況についていくつかのケースを分析する。

2. 研究背景

コロナ禍は様々な分野で社会を大きく変化させた。たとえば、山口大学の留学生の数はコロナ前と比べると若干減少している（表1）。ただし、表1の留学生数にはオンライン受講者も含まれているので、実際はコロナの影響をかなり強く受けている。

表1 山口大学における留学生数の変移（各年5月1日 単位：人）

年	人数
2019年	432
2020年	388
2021年	359
2022年	367

出典：山口大学（2019）『Yamaguchi University Guide 2019』24頁、山口大学（2020）『Yamaguchi University Guide 2020』24頁、山口大学（2021）『Yamaguchi University Guide 2021』24頁、山口大学（2022）『Yamaguchi University Guide 2022』24頁から作成

筆頭著者（朝水）はコロナ禍になってから勤務先における留学生を対象とした聞き取り調査を何度か行い、この歴史的な変化について徹力ながら記録を残してきた。本研究では留学生に関する質的調査を行うが、プロトタイプと位置付けられるこれまでの研究には、以下のものが挙げられる。

朝水・姚・周（2020）「新型コロナ後の日本における短期外国人労働者」では、日本における外国人労働者のうち、留学生のアルバイトがコロナ禍によって激減した現象について経済的な側面から報告した。朝水・周・姚・李（2021）

「新型コロナ禍における国際教育への挑戦」では、日本に入国できない留学生や入国できても対面での授業ができず、オンラインで受講している留学生の諸ケースについて当時の記録を残した。朝水（2022）「コロナ期における国際学生移動」では対象の留学生の属性やサンプル数を増やし、経済状況や授業のオンライン化のみならず、メンタル面など、より多様なケースについて総合的に分析を行った。

ただし、上記の対象となった留学生は日本語能力試験のN1（＝最上級）を有している大学院レベルの正規生であり、他の留学生と比べれば日本の生活に適応しやすいと思われる。つまり、日本語学校等で日本語学習中の留学生や英語で授業を受けているEMI留学生など、日本語が十分わからない留学生にとって、コロナ禍での日本の生活はより困難であったと想定される。山口大学における留学生は中国出身者が多い（表2）。中国や韓国からの出身者は日本語話者が多いが、表2に見られるように、インドネシアやマレーシア、バングラデシュなどの出身者もあり、その多くはEMIコースに所属している。

表2 山口大学における主要出身地別留学生数（2022年5月1日現在 単位：人）

国名	人数
中国	195
韓国	35
インドネシア	27
マレーシア	22
バングラデシュ	15
ケニア	10
モンゴル	10

出典：山口大学（2022）『Yamaguchi University Guide 2022』24頁から抜粋

3. コロナ期における留学に関する先行研究

コロナ禍での日本における留学生の研究は様々な分野に及ぶ。まず、日本語教育の変化に関わるものであるが、加藤（2022：83-84）「コロナ禍の日本語学校におけるオンライン授業」では、日本語学校におけるコロナ禍での日

本語教育について言及している。一般的に大学に比べて規模の小さい日本語学校は授業のオンライン化が遅れたとされるが、それでも比較的規模が大きく、大学進学に必要な日本語能力試験N2以上の受講生が多い日本語学校ではオンライン授業が整備された事例が少なからず挙げられるとされる。河内・村田・長谷川・竹山・池田（2021：36-38）「教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか」では、コロナ禍で急速に普及したZoomを用いた日本語学習のメリットとデメリットについて言及している。佐古（2022：93-94）「コロナ禍における日本語学習者の現状と課題に関する一考察」は来日後の留学生と来日できずオンラインで学んでいる留学生の両方を分析しており、後者の方が学習面でより手厚い支援が必要であるとしている。

学習面だけでなく、留学生がコロナ禍の日本で生活するための困難さについて言及しているものも少なくない。近藤・石倉・中野（2020：71-72）「学校および留学生・日本人学生が直面した留学交流に関する令和2年の課題」では、都市部の私立大学における日本語の分かる私費留学生と、地方の国立大学における英語学位コースの国費留学生では日本における生活様式が元々異なっていたとされ、そのためコロナ禍での対応も異なったものが求められるとされている。近藤（2020：79-80）「新型コロナウイルスと留学生のホームステイ」では、ホストファミリー自身がホームステイを再開したい場合でも、近所の目が気になって再開できない場合など、日本独特の社会背景があることを挙げている。松田，安（2022：34-35）「日本在住の中国人留学生はオンライン授業を通じて日本をどのように捉えているか」では、留学生の聞き取り調査から、コロナ前とコロナ禍での日本の暮らしの違いについて言及している。

留学生のサポートは、留学生対応の専門の教職員だけでなく、学生の視点も重要である。猪又・西村（2022：137-138）「留学生チューター制度の現状と課題」では、留学生をサポートする日本人学生であるのチューターの事例報告を行っており、コロナ禍におけるオンラインでのサポートについて述べている。島津・丸山（2022：27-29）「高等教育国際化の手段としての国際必修授業が持つ可能性と課題」では、留学生をサポートする日本人学生の人材

育成について、コロナ前の対面型とコロナ期でのオンライン型のトレーニングの事例を比較している。

さらに、コロナ禍での留学生問題を総合的に研究している例として、たとえば村田の一連の研究が注目に値する。村田 (2021: 18-21) 「孤立する留学生のオンライン学習支援とソーシャルサポート」では、来日後にホテルでの隔離が課されていた時期の留学生に対し、日本人学生のボランティアが Zoom や Line などサポートしていた諸事例をまとめている。村田 (2022a: 7-8) 「コロナ禍の「日本留学」」では、来日できたが自室でのオンライン授業のみで日本人学生との交流ができないストレスや、来日できず母国で時差に悩まされながらオンラインで授業を受けるストレスなど、オンライン教育の問題点を挙げている。村田 (2022b: 18-19) 「コロナ禍の留学生たちによる経験の言語化とソーシャルネットワーク」では、コロナ禍の時期に日本で学んでいる留学生に交流関係を図式化してもらうという画期的な手法を用いており、大学のキャンパス外でのネットワークにも踏み込んだ問題点を挙げている。村田 (2022c: 28-29) 「コロナ禍の留学生たちによるフィールドワークの意味」では、留学生のキャンパス外での行動にさらに踏み込み、留学生による就職活動や居酒屋の参与観察をエスノグラフィー化して個々に分析している。

なお、日本における留学生について、コロナ時に日本にいた外国人研究者による調査や日本人研究者と外国人研究者との共同研究も見られる²⁾。NAKASATO, KAYASHIMA (2021: 6-8) 「Student Mobility to Japan in the Age of COVID-19: A Matter of Degree」では、英語圏諸国と比べ、日本の学位コースではコロナ禍でも留学生が減っていないことに注目しているが、その前提となるオンライン教育のメリットとメンタル面での問題点に

2) 本研究の対象とは外れるが、日本で暮らす留学生と同様に外国籍の教員もコロナ禍の影響を受けている。詳しくは以下の文献を参照されたい。HAMMOND Christopher D., RADJAI Leyla (2022) "Internationalization of Curriculum in Japanese Higher Education: Blockers and Enablers in English-medium Instruction Classrooms in the Era of COVID-19", HUANG Futao (2021) "Impacts of the COVID pandemic on international faculty's academic activities and life in Japan"

ついても着目している。IVANOVA (2021 : 70-71) 「International Student Support Organizations in Japan and Australia: Response to the COVID-19 Crisis」では、コロナ禍でオーストラリアと日本で学ぶ留学生を比較しており、オーストラリアでは外国人差別、日本では孤独が大きな問題であるとしている。SATO, BISTA, MATSUZUKA (2022 : 51-52) 「COVID-19 Pandemic's Impact on International Students in Japan and the United States: Comparative Study From National and Institutional Context」によると、アメリカ合衆国では留学生の出身国からの仕送りの減少、日本では留学先のアルバイトからの収入が減ったことが問題になっている。

ホスト社会の変化も重要な要素である。WANG, HU, MIYOSHI (2022 : 138-140) 「Chinese Residents in Japan Living in the Margins During the COVID-19 Outbreak: A consideration of their living conditions using the life story method」では、新型コロナがまん延した初期のころ、中国語話者の留学生に対して日本人の接し方が冷たくなった事例をいくつか挙げている。TENG, TAKEMOTO (2022 : 141) 「Associations Between Psychological Conditions and Social Capital Among Chinese International Students in Japan During the COVID-19 Pandemic」では、日本におけるコロナ禍の中国人留学生にとって、日本人との交流関係がメンタルの維持で重要であるとしている。DAO, LIM (2022 : 11) 「Fear of disasters within the risk communication network of foreign students in Japan amid the COVID-19 pandemic crisis: A cohort design」では、EMIコースと思われる社会科学系の留学生を対象について調査し、コロナ禍の恐怖の緩和とメンタルの状況の改善について模索している。

日本における留学生の問題は日本語能力だけではない。KINOSHITA (2021 : 224-225) 「REFLECTION: Connected or Separated? Transformation of Muslim Student Community in Japanese University under the COVID-19」では、福岡在住のムスリムの学生たちがコロナ禍によってキャンパス内の礼拝所が使えなくなり、日常生活に大きな影響を与えていること

を報告している。なお、日本の国立大学は原則としてキャンパス内に常設の宗教施設を設置できないので、留学中のムスリム学生はキャンパス内の共有施設を定期的に借りたり、キャンパス外の隣接地に立地するモスクに通ったりするなど、コロナ前から工夫を凝らしている³⁾。

4. コロナ禍の日本におけるEMI留学生に関する諸問題

4. 1. 先行研究から見た課題

上記のように、コロナ禍になってから3年近く過ぎたため、日本におけるコロナ禍での留学生教育に関する研究や事例報告もある程度蓄積されるようになった。しかし、大学や日本語学校の多くが都市部に集中していることから、地方の事例を扱っている研究は都市部のものと比べて相対的に少ない。さらに、地方の大学では、英語で授業を開講し、場合によっては日本語が分からなくても卒業できるEMIコースがコロナ前から増えていたが、これらのコースで学んでいる留学生は、日本語が堪能な留学生よりもコロナ禍での生活が困難であったことが想定される。

ただし、日本におけるEMIの研究は、オンラインを活用した日本人学生対象の英語開講授業の理解度に関する研究は急速に発展してきたものの、留学生対象の英語を用いた日本理解に関する研究は2022年9月の時点ではほとんど見られない。そこで、本研究では、地方大学のEMI留学生の事例として、山口大学における英語話者の留学生の生活を記録したものを紹介したい。調査方法であるが、2022年前期（4月－7月）に実施した、大学院東アジア研究科「Special Lecture」の授業にて、EMI留学生にコロナ禍に関する短い英文レポートを執筆させ、収集した。これらの英文レポートの中から、日本への移動や移動後の暮らしに関するものを抜粋し、朝水が和訳した。それぞれのケースは以下のとおりである。

3) ムスリム学生の日本留学での適応について、例えば以下の文献を参照されたい。岩崎真紀 (2018) 「ムスリム学生と異文化適応—礼拝空間をめぐる日本の国立大学のとりくみ—」

4. 2. コロナ前に再入国した留学生のケース

まずは、新型コロナが日本でまん延する前に入国できた周文婷氏（中国出身：女性）の事例である。

COVID-19がまん延し始めたころ、マスクをつけての生活になり、どこへ行くにもマスクが必要になった。他方、死者が報道されていた東京と比べると山口の感染者は極めて少なく、安全であったため、それほど危機感はなかった。しかし、大学とアパートの間の移動や日常生活に必要な買い物以外の社会的な交流は少なくなった。

周文婷

都市部の大学と地方の大学の大きな違いとして、コロナに対する危険度や危機感の違いが挙げられる。山口大学の場合、県外出身者の多い経済学部は2020年度の初めからZoomなどオンライン授業を想定していたが、いくつかの学部では従来通りの対面授業を実施しようとしていたところもあった。結局はコロナのまん延のため2020年度の授業の2日目から前期は全学的に対面授業が中止になったが、それでも首都圏の大学と比べれば危険度は相対的に低かったと言える。

さらに、コロナに関する様々な支援が留学生の暮らしをサポートした。留学生に対する給付金については導入前に様々な議論が行われたが、結果として日本人学生と同様に受給できるようになり、留学生の暮らしを支えた。フードバンクなどを活用し、留学生に食料を提供する団体も山口を含んだ日本各地に存在した。

一留学生として、（日本：朝水補足）政府からの給付金はコロナ禍の暮らしを緩和した。さらに、外国人の学生のために、学校やNGOが親切に食料を提供してくれた。ウイルスがまん延した世界であっても、人の温かさは残っていた。

周文婷

なお、周氏は英語話者ではあるが、日本語能力試験もN1であり、日本語での十分なコミュニケーション能力を持っている（朝水・周・姚・李2021：22-23）。日本語が分からない英語話者と比べれば日本で暮らしていくためには有利ではあるが、それでもコロナ禍の暮らしが長期化するにつれ、様々な問題が生じてきた。

私だけでなく、私の周りの多くの人もCOVID-19による影響で仕事を失った。愛する者を失っても帰国できず、心残りに思っている者もいる。高価な航空券と孤独との間でジレンマを持っている者もいる。私の場合、やむを得ない事情で2021年に一時帰国したが、空港やホテルで28日間のPCR検査を受け、一般的な会社の3か月分の給料に相当する40万円かかった。このような事情のため、自由に移動できなかった者もいる。私自身、この3年間、たくさんの貴重な時間と好機、経験を失った。

周文婷

4. 3. 入国規制後に再来日した留学生のケース

次は、一時帰国中にコロナ禍になり、入国規制のため再来日が困難になり、入国規制の緩和になってからようやく日本に再入国できたEMI留学生の徐少辰氏（中国出身：男性）の例である。

個人的なことだが、中国から日本に戻ってきたのは2020年10月8日だった。航空券はそれまで何度もキャンセルされ、航空運賃もとても高くなっていった。必要なものとして、私が用意したものは以下のものである。

必要書類：

1. 大使館での再入国許可書

2. 搭乗72時間以内の核酸増幅検査陰性証明書

到着後：

1. 空港における再度の核酸増幅検査
2. 空港近くのホテルでの14日間隔離
3. 隔離期間中の健康状態と体温測定報告を検疫へEメールで毎日
4. 14日後、ようやく新幹線で新山口駅へ

徐少辰

なお、2020年10月の時点では、在学中の留学生が再来日することは可能であったが、新規の留学生は国費の場合を除けば来日が困難であった。なおかつ入国できる国際空港が限られており、山口の場合は最寄りの国際空港である福岡空港が入国規制のため使えない状況であった。首都圏の大学ならば成田空港から大学の公用車で送迎をすることが可能であったが、当時は入国後の公共交通機関の使用が制限されていたため、地方大学へ行くには高額な専用の送迎車をチャーターするか、入国後14日間ホテルで隔離される必要があった。

その後下記のように成田と関空以外の国際空港も使えるようになったが、大幅に減便され、なおかつ料金が大幅に値上がっていた。中国の場合、中国側の入国制限は日本より厳しかったため、国際移動のための手続きも煩雑であった。

中国籍市民にとってCOVID-19の影響は大きい。COVID-19のまん延前、中国と日本の間の旅は便利で安かった。

1. 搭乗前の健康診断は必要なかった。
2. 福岡と上海間の往復運賃は6万円ぐらいだった。

COVID-19のまん延後は以下の通り。

1. 中国籍の市民が中国に戻るために搭乗72時間以内の核酸増幅検査。
2. 多くのフライトがキャンセルになり、多くの国で入国規制。日本から中国への平均的な航空運賃が片道15万円ぐらいに上昇。
3. 中国到着後に14日間の隔離が必要。飛行機から降りてから指定されたホテルで待機。

徐少辰

なお、徐氏は中国籍だが、オーストラリアの大学を卒業していることもあり、英語でのオンライン授業にはある程度慣れている。しかし、日本語の学習経験は山口大学入学までなく、初級からの学習者であったため、留学生向けの日本語授業のオンライン化には苦労したようである。

多くの授業がオンラインになった。個人的には、(外国人向けの：朝水補足)日本語の授業を除き、オンライン化は大きな影響はないと思う。(外国人向けの：朝水補足)日本語の授業をオンラインで行うとき、学生と教員間の相互交流が著しく低下する。これは、授業の有効性に大きな影響を及ぼす。

徐少辰

さらに、私費留学生にとって、アルバイト収入の減少は日本での生活に大きな影響を及ぼす。山口大学の留学生の場合、他大学と同様に、観光を含むサービス産業のアルバイトをすることが多かったが、この部門はコロナ禍の影響を大きく受けた。さらに、飲食産業のアルバイトもコロナの影響を受けた。

個人的に、A食品会社とS観光施設でアルバイトをしていた。しかし、S観光施設はCOVID-19の影響で長期間閉鎖しており、A食品会社もしばらくの間アルバイト従業者を3分の1程度に減らしていた。2021年度の時点でも、この状況は改善されなかった。

徐少辰

4. 4. 入国規制後に来日した新規留学生のケース

なお、中国籍の留学生の場合、山口大学の留学生では最大のグループであり、同国出身者同士の相互互助も可能である。ただし、他の国や地域の出身者は中国籍の留学生ほど多くはないので、来日後の状況が変わってくる。

次の事例はインドネシア出身のEMI留学生（男性）のケースである。セノ・ブディ・アジャル氏は新規の留学生だったため、コロナ禍での入国規制で来日がしばらくできず、入学当初はインドネシアからオンラインで授業を受けていた。そのため、移動に関するコロナ前とコロナ後との比較は記載されていない。なお、先述のKINOSHITA（2021）で挙げたように、インドネシアを含んだムスリムの留学生にとって礼拝は生活の重要な部分である。そのため、セノ氏にとって、山口での礼拝の状況は大きな関心事であったと思われる。

2020年は大規模集会への移動制限があったため、ムスリムの家族は家庭での礼拝を行った（ようである：朝水補足）。2021年になると、集会の規制が緩和されたため、ムスリムの出身国別の団体による礼拝が行われるようになった。たとえば、KMIY（Indonesian Muslim family Yamaguchi）は（山口市内にある：朝水補足）山口大学吉田キャンパスで毎週金曜日に礼拝を行っている。

セノ・ブディ・アジャル

山口大学は主に山口市と宇部市にキャンパスがあるが、コロナ禍での集会

の状況は自治体によって異なっている。なおかつムスリムの留学生であっても、インドネシアやマレーシア、バングラデシュなど、出身国によって祭典への参加が異なっているようである。

イード・アル・フィトル (Eid al-Fitr) とイード・アル・アドハー (Eid al-Adha) は重要な祈りを伴う祝日である。2021年は、宇部市では入場制限があったため、山口市のみでKMIY主催のイード・アル・フィトルが行われた。2022年のイード・アル・ファトルはゴールデン・ウィークにあたったため、マレーシア人やバングラデシュ人の学生の多くは県外のモスクに行ったようである。そのため、2022年のイード・アル・ファトルも (インドネシア人留学生が多い：朝水補足) 山口市で行われた。

セノ・ブディ・アジャル

なお、セノ氏のコメントの補足になるが、工学部のある宇部市の常盤キャンパスにはマレーシア出身者が多く、経済学部のある山口市の吉田キャンパスにはJICA奨学金のバングラデシュ出身者が多い。インドネシア出身者は比較的人数が多いこともあり、宇部と山口の両方のキャンパス周辺に在住している。そのため、国や自治体の移動規制や集会の規制に加え、留学生の在住状況も祭典の実施に影響を及ぼしている。

2021年と2022年のイード・アル・アドハーはYMC (Yamaguchi Muslim Community) によって山口市と宇部市で行われた。2022年には、山口市では国際交流会館 (= 山口吉田キャンパス内の留学生寮：朝水補足) で開催され、宇部市では工業会館 (= 工学部キャンパスの施設：朝水補足) で開催された。これらのことから、YMCの多くは山口大学の留学生が多いことが分かる。

セノ・ブディ・アジャル

5. おわりに

本研究では、先行研究にて比較的手薄であったEMI留学生のコロナ禍での日本の生活について着目した。中国人EMI留学生の場合、日本語話者の中国人留学生と同様に、コロナ禍に伴う移動の制限やアルバイトの減少などが大きな関心ごとのようである。山口大学におけるインドネシア人EMI留学生については、日本語話者のインドネシア人留学生との比較ができなかったが、概ね先行研究と同様にコロナ禍での礼拝が重視されていると想定される。

なお、本研究の課題であるが、EMI留学生のサンプルが少なかったため、各ケースの留学生について複数の事例で比較することができなかった。特に中国籍以外のEMI留学生についてはケースが一つだけであり、なおかつ在日期間も長くなかったため、モノグラフとしても不十分であった。これらの不足点を補うため、今後は山口大学のケースだけでなく、他大学の類似した事例も含みながら、EMI留学生の日本での生活とその問題点について普遍化を図りたい。

参考文献

- 朝水宗彦, 姚博怡, 周文婷 (2020) 「新型コロナ後の日本における短期外国人労働者」『山口経済学雑誌』 69(1-2), 79-94頁
- 朝水宗彦, 周文婷, 姚博怡, 李妍家 (2021) 「新型コロナ禍における国際教育への挑戦」『山口経済学雑誌』 70(3-4), 13-29頁
- 朝水宗彦 (2022) 「コロナ期における国際学生移動」『山口経済学雑誌』 70(5), 107-123頁
- DAO Minh Tuan, LIM Seunghoo (2022) "Fear of disasters within the risk communication network of foreign students in Japan amid the COVID-19 pandemic crisis: A cohort design", *International Journal of Disaster Risk Reduction*, 71, pp.1-11
- HAMMOND Christopher D., RADJAI Leyla (2022) "Internationalization of Curriculum in Japanese Higher Education: Blockers and Enablers in English-medium Instruction Classrooms in the Era of COVID-19", *Higher Education Forum*, 19, pp.87-107

- HEDRICK Roy Gerard III (2021) "Migrants or Study Abroad? An analysis of the study abroad experience of foreign students in an English taught degree program in Japan", *Journal of Global Studies*, 12, pp.309-327
- HEIGHAM Juanita (2014) "Voices on Campus: International Students in an English-medium Instruction Degree Program in Japan", *Journal of the Ochanomizu University English Society*, 5, pp.65-74
- HUANG Futao (2021) "Impacts of the COVID pandemic on international faculty's academic activities and life in Japan", *Higher Education Quarterly*, 76, pp.260-275
- 猪又由華里, 西村政子 (2022) 「留学生チューター制度の現状と課題」『*Journal of Inclusive Education*』11, 131-140頁
- IVANOVA Polina (2021) "International Student Support Organizations in Japan and Australia: Response to the COVID-19 Crisis", *Journal of the Asia-Japan Research*, 3, pp.63-81
- 岩崎真紀 (2018) 「ムスリム学生と異文化適応—礼拝空間をめぐる日本の国立大学のとりくみ—」『九州大学留学生センター紀要』26, 1-23頁
- 加藤登紀 (2022) 「コロナ禍の日本語学校におけるオンライン授業」『国際言語文化学会日本学研究』7, 81-90頁
- 河内彩香, 村田晶子, 長谷川由香, 竹山直子, 池田幸弘 (2021) 「教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか」『*多文化社会と言語教育*』1, 30-45頁
- KINOSHITA Hiroko (2021) "REFLECTION: Connected or Separated? Transformation of Muslim Student Community in Japanese University under the COVID-19", *JOURNAL DIALOGUE STUDIES*, 9, pp.210-227
- 近藤佐知彦 (2020) 「新型コロナウイルスと留学生のホームステイ (コロナ期の草の根国際交流)」『*グローバル人材育成教育研究*』8(1), 77-83頁
- 近藤佐知彦, 石倉佑季子, 中野遼子 (2020) 「学校および留学生・日本人学生が直面した留学交流に関する令和2年の課題 (4月末から5月にかけてのアンケート調査報告)」『*グローバル人材育成教育研究*』8(1), 70-76頁
- 松田勇一, 安龍洙 (2022) 「日本在住の中国人留学生はオンライン授業を通じて日本をどの

ように捉えているか』『シティライフ学研究』23, 19-36頁

村田晶子 (2021) 「孤立する留学生のオンライン学習支援とソーシャルサポート」『多文化社会と言語教育』1, 14-29頁

村田晶子 (2022a) 「コロナ禍の「日本留学」」『多文化社会と言語教育』2, 1-15頁

村田晶子 (2022b) 「コロナ禍の留学生たちによる経験の言語化とソーシャルネットワーク」『多文化社会と言語教育』2, 16-25頁

村田晶子 (2022c) 「コロナ禍の留学生たちによるフィールドワークの意味」『多文化社会と言語教育』2, 26-38頁

NAKASATO Lauren, KAYASHIMA Nobuko (2021) “Student Mobility to Japan in the Age of COVID-19: A Matter of Degree”, *JICA Knowledge Report*, 2, pp.1-14

佐古恵里香 (2022) 「コロナ禍における日本語学習者の現状と課題に関する一考察」『国際言語文化学会 日本学研究』7, 91-105頁

SATO Yuriko, BISTA Krishna, MATSUZUKA Yukari (2022) “COVID-19 Pandemic’s Impact on International Students in Japan and the United States: Comparative Study From National and Institutional Context”, *Journal of Comparative & International Higher Education*, 14(3B), pp. 44-57

島津礼子, 丸山恭司 (2022) 「高等教育国際化の手段としての国際共修授業が持つ可能性と課題」『教育学研究ジャーナル』27, 21-30頁

TENG Yuanyuan, TAKEMOTO Keisuke (2022) “Associations between Psychological Conditions and Social Capital among Chinese International Students in Japan during the COVID-19 Pandemic”, *Journal of Disaster Research*, 17(1), pp.136-143

WANG Shinuo, HU Yuyu, MIYOSHI Emako (2022) “Chinese Residents in Japan Living in the Margins During the COVID-19 Outbreak: A consideration of their living conditions using the life story method”, *Osaka Human Sciences*, 8, pp.129-156

山口大学 (2019) 『Yamaguchi University Guide 2019』山口大学

山口大学 (2020) 『Yamaguchi University Guide 2020』山口大学

山口大学 (2021) 『Yamaguchi University Guide 2021』山口大学

山口大学 (2022) 『Yamaguchi University Guide 2022』山口大学